

## 日本における孔子祭

もくじ

欠端 實

- 一、はじめに
- 二、日本における孔子祭
  - (一)、多久聖廟の積菜
  - (二)、閑谷学校の積菜
  - (三)、足利学校の積奠
- 三、中国(台北)の孔子祭
- 四、日本と中国の比較
- 五、むすび

### 一、はじめに

地球が本当に小さくなってしまった今日、我々は、世界各地で長い歴史を積みかさねてきた慣習や行事を、同時的に見ることができるようになった。

以下、日本において今日もなお行われている孔子祭(積奠、積菜)と、中国のそれとの比較を試みたいと思う。日本における孔子祭は、佐賀県の多久にしても岡山県の閑谷にしても、江戸時代以来の伝統を今日に伝えているものであって、まことに驚嘆に値する。東京の湯島聖堂や栃木県の足利の孔子祭も古式に則って再興され、往時

の姿を今に伝えている。筆者は、一九八七年に、多久、閑谷の釈菜、足利の釈奠に参加する機会に恵まれたので、先に（一九七六年）出席することのできた台北市の孔子祭との比較を試みてみたい。

両者の比較を通じて言えることは、まず当然のことではあるが、基本的には内容を同じくしている、ということである。しかし他方では、中国と日本の孔子祭との間に、或いは日本の各地における孔子祭相互間に、相異としてとりあげ考察の対象としなければならぬ点も見うけられる。以下、短時日の内に見ることのできた孔子祭を紹介し、その間の比較を通じて考えたことを述べたいと思う。

孔子祭（釈奠、釈菜）という儀式の異同を明らかにし、その由ってきたる文化的背景にまで言及したいのであるが、今はその準備ができていない。他日、その点に触れて拙稿を発表したいと考えている。

## 二、日本における孔子祭

### (一)、多久聖廟の釈菜

佐賀県多久の聖廟は、邑主多久茂文によって創建された。茂文は佐賀藩主鍋島光茂の三男で多久家に養子入りした人である。若い頃から儒学を尊崇し、元禄のはじめ、東原庵舎という学舎を建て、孔子像と四配の像を清國に注文し、学舎内に安置したとい<sup>②</sup>う。

茂文は「事に先んじ、聖殿を営み、大祭を脩めん。しこうして邦内、化に向かい、恰かも東武（江戸）を越えん」<sup>③</sup>との自負から、聖廟の建設の儀を本藩の佐賀に願ひ出た。幕府の許可も得て、元禄五（一六二九）年に着工、宝永五（一七〇八）年に竣工した。同年八月十四日、茂文みずから聖像を奉じ、献官となって釈菜を執行した。以後、二百五十年、祭儀は連綿として続き今日に至っている。

現在では四月十八日、十月十八日の春秋二回、聖廟で釈菜の儀が執りおこなわれている。ただし、昨年秋季の釈菜は、聖廟大改修中のため、場所を移して挙行された。祭王（献官）は市長がつとめ、その他市議会議員、教育長、市内学校長、市役所職員を祭官として式典が挙げられた。

多久の祭儀のより処となっているのは「釈菜儀節」<sup>④</sup>である。それによれば、祭儀は深夜丑刻（午前二時）に開始することとなっているが、今日午前十時の受付開始に改められている点等を除いて、「釈菜儀節」の記載そのままに式が運ばれている。以下当日の式次第を、配布された「多久聖廟釈菜式順」<sup>⑤</sup>に従って掲載したい。

- |             |         |                    |             |                    |               |   |                            |
|-------------|---------|--------------------|-------------|--------------------|---------------|---|----------------------------|
| 1、詣廟        | 2、排班    | 3、迎神               | 4、鞠躬        | 5、献饌               | 6、点閲          | 7、詣盥洗所  | 8、詣香案                      |
| 前           | 9、上香    | 10、拝               | 11、詣爵洗所     | 12、詣酒尊所            | 13、至聖先師文宣王神位前 | 14、詣・跪  | 15、献爵                      |
| 16、拝        | 17、詣讀祝位 | 18、衆官皆跪            | 19、讀祝       | 20、拝               | 21、献爵於配位      | 22、詣  | 23、復聖顔子・宗聖曾子・述聖子思子・至聖孟子神位前 |
| 24、跪・献爵・拝・詣 | 25、行重献  | 26、詣酒尊所            | 27、詣        | 28、至聖先師文宣王神位前      | 29、詣・跪        | 30、献爵如初献之儀  | 31、                        |
| 32、献爵於配位    | 33、詣    | 34、顔子・曾子・子思子・孟子神位前 | 35、跪・献爵・拝・詣 | 36、                | 37、詣酒尊所       | 38、至聖先師文宣王神位前   | 39、詣・跪                     |
| 40、献爵如初献之儀  | 41、拝    | 42、献爵於配位           | 43、詣酒尊所     | 44、顔子・曾子・子思子・孟子神位前 | 45、四配献爵       | 46、如  | 47、衆官復位                    |
| 48、讀詩       | 49、衆官皆跪 | 50、讀詩              | 51、撤饌       | 52、詣香案前            | 53、           | 54、上香   | 55、拝                       |
| 56、排班       | 57、送神   | 58、鞠躬              | 59、礼畢       | 60、揖礼              | 61、収閉         | 祭儀終了後、式場は一般参列者に開放され、聖龕中の孔子像をはじめ供饌されたもの、祭器など、自由に参観することができる。同時に孔子像の前には献香の用意がされており、一般参列者が上香、礼拝するのにまかされ |                            |

ていた。係の人の話によれば、撒饌された紅白の餅が、小さく切り分けられ、参加者に配られるのだということであった。

多久聖廟の積業の特色は、祭官の服装が中国式であるという点である。しかし、筆者が一番心動かされたことは、この日の積業に参加した方々の多くが、式場の奥に安置された聖龕中の孔子像を遠くから礼拝し、用意された賽銭箱に賽銭を投げ入れていた姿を見たことである。こうした光景をどのように考えたらよいのであろうか。これは、多久において孔子の教えが市民の心を深く捉えていることを物語るものと、筆者は考えたい。つまり多久茂文以下歴代の邑主の努力の結果、多久の人々は、孔子の教えを一種の信仰に近い形において受けとめるまでになったのではあるまいか。

日本においては、孔子の教え（ならびに儒教）は庶民生活にほとんど影響を与えなかったとも言われている<sup>(6)</sup>であるが、少なくとも多久においては、邑民の心を深く捉えていたと見てよい。こうした光景は他地方では見ることのできないものである。現在から将来にわたって、私たちが孔子の教えを学び自己のものとしていく時に、多久の人々の孔子に対するこのような態度には、深く考慮を払わなければならないのではあるまいか。

## (二)、閑谷学校の積業<sup>(7)</sup>

岡山県の閑谷学校は池田光政によって創建された。

光政の大名としての特質は、専制的であるとともに啓蒙的な君主としての權威性に貫かれており、政治理念の基調は、あくまでも儒教的な仁政主義（徳治主義）に置かれていた、とされる<sup>(8)</sup>。

彼は幼少から儒学を中心として学問修業に専念したが、大名領主として政治と学問の一体化を志向し、そのため家臣に対しても学問修業を強く督励し、さらに領民全体の教育の振興にも異常な熱意を注いだ。閑谷学校の創設は右のような光政の基本的理念が具体化されたものと見なされている。

まず寛永十八（一六四一）年、岡山城はずれの花島に花島教場を設け、習学之士を集めて陽明学と武芸を修学させた。その教育の目的の中心は、「それ武士は民を育む守護なれば、守護の徳なくしては叶うべからず」と定められたことの中に端的に示されているように、人民育成の任を負うものとされた士の徳の涵養に置かれていた。

寛文六（一六六六）年には、城内の石山に仮学館を設け、さらに寛文九年には藩校が建設された。学校には「中室の正面」に「孔子の廟」が設けられ、開校にあたっては献香し「孝経」を誦したという。その後学校では、毎年正月五日に学校奉行以下の役人はじめ大小生等が講堂に集まり、聖位の前で献香・礼拝し、「孝経」の読み始めと講釈を行ない、二月には積業が執行される慣例となった。

光政は寛文七（一六六七）年には、各郡に手習所を設置して、庶民の子弟の教育に力を入れようとした。寛文十年、閑谷学校設立の命が光政によって出され、延宝元（一六七二）年、講堂が完成、翌二年には聖堂もできあがった。これに伴って、先の郡中手習所は延宝三年に廃止されることとなった。

貞享元年には新聖堂ができ、大成殿と命名された。元禄十四（一七〇一）年に至って閑谷学校の全容が完成、孔子金銅像も鑄造された。現在の特別史跡閑谷学校は、この時の姿を今日に伝えている。

現在、閑谷学校の積業は校内の大成殿で催されている。式典参列者は招待者に限定されており、開式とともに大成殿の外門が閉ざされ、式典の終了するまで出入ができない。

当日は顕彰会会長、市長、商工会議所関係の人々を含む百人程の参列者があつた。

祭官は閑谷学校内にある岡山県青少年教育センターの方々ならびに、もと閑谷高等学校の先生方（今日では和

気高等学校)によってつとめられる。服装は洋式で、黒の略礼装である。

当日の式次第はつぎの通りである。

- 1、一同起立。敬礼。着席。
- 2、掌儀升りて簾を褰げ横を啓く。
- 3、饌菓を進む。
- 4、衆皆堂下の位に就く。
- 5、一同起立。敬礼。着席。
- 6、掌儀点閲。
- 7、参神再拜。
- 8、献官盥帨。升りて香を焚き、再拜。
- 9、洗爵、酌酒、献酒、一同起立。
- 10、祝、堂に升る。
- 11、祝、祝文を読む。上下の衆、皆平身。
- 12、一同着席。
- 13、献詩。
- 14、会長、升りて敬拜。
- 15、辞神。再拜。
- 16、相撮して退く。

17、饌菓を撤す。

18、掌儀、横を閉じ、簾を下す。

19、望燎。

20、一同起立。敬礼。

式典終了後は、招待参列者のみならず、式場外にいた一般の人々も孔子像を参拜し献香することができる。

閑谷学校における釈菜の特色をあげておきたい。

第一は、開式にあたって釈菜の儀の中で、孔子像が納められている聖龕の扉がひらかれるのであるが、孔子像以外は誰も祭られない。大成殿内には孔子像のみが安置されているにすぎず、四配、十二哲の像も神位もない。

このように祭祀の対象を孔子に限定し、孔子の弟子ともいべき人を尽く祭祀の対象からはずしてしまった釈菜(あるいは釈奠)は他に例がないのではなからうか。

第二は、式次第の中に招魂の儀ともいべき迎神の儀が欠けている(当然ながら送神の儀もない)。多久、足利ともに簡略化された、変容された形式にせよ、それぞれ迎神、送神の儀がある。閑谷においてこれを欠くのはいかなる理由によるのであろうか。この点はごく最近にこのようになったのではなく、すでに元禄十五年以来である。ここに、後述するように、日本における孔子祭の一つの特色が端的にあらわれている。

第三に、式場の構造、広さ等に起因するのであろうが、参列者を限定し、式典進行中は一般の人は式場に入出できないことである。このような方法を探らざるを得ない理由も理解できるのであるが、何らかの方法を案出して、もう少し開放的にし、参列の希望を有する人々の願いを叶えてもらいたいものである。

(三) 足利学校の積奠<sup>(1)</sup>

足利学校は平安時代の天長九（八三二）年、小野篁の創設と伝えられ、室町初期の永享十一（一四三九）年に、関東管領上杉憲実等によって再興された。この時に積奠の儀式も再興されたのではないかと考えられている。応仁（元）（一四六七）年、現在の地に移され、寛文八（一六六八）年には大成殿が修築された。以後、積奠が毎年執行されることとなった。下って寛政年間（一七八九―一八〇〇）には諸式が整備され、春に積菜、秋に積奠が行なわれるようになった、ということである。しかしその後もなお曲折があり、幕末になって足利藩主戸田忠行が、積奠、積菜の儀を再興した。明治十三（一八八〇）年、「積奠略式」を定め、冬至に積奠を挙行するようになった。この「積奠略式」が現行の積奠の基準になっている、とのことである。そして大正四（一九一五）年からは、十一月二十二日に改められ、今日に至っている。<sup>(2)</sup>

当日の式次第はつぎの通りである。

- 1、掌事は神官、協律郎、打鐘手を伴って昇堂、堂内の整頓を見る。
- 2、午前十時、鳴鐘三点、開式。  
掌事は堂内の諸事整頓を見了し、打鐘手、十時に至れば鳴鐘三点、祭官に開始を告ぐ。
- 3、祭官、盥漱。  
祭官は杏壇門前にて盥漱し門より入り東階より昇堂、楹の前に北面並列す。一般参列者着席。
- 4、掌事は拳式立会人を導き、堂の東側に居らしむ。
- 5、祭官立礼、再拜、着席。
- 6、掌事、告辞。

7、大麻行事。  
掌事、拳式立会人、一般参列者に祭儀執り行なうを告ぐ。

8、迎神の儀。  
祓主、祓詞を奏し大麻行事を行なう。

9、供饌・執饌。  
神官、開扉の後、迎神の祝詞を奏す。

10、供饌（奏樂）  
賛礼、献官を引き膳所に至る。簋、篋、籩、豆、俎、順次に供う。掌事はこれを受けて正供す。ついで執尊の儀となる。

11、初献の人、膳所に至り爵をとりて洗所に至る。洗所の人、爵を受けて洗滌し酒を汲みて渡す。初献の人、正面祭壇に供す。亜献、終献、分献の人、各々この例にならう。配供の人、爵をとりて野相公（小野篁）に配供す。（奏樂止む）

12、祝、祭官跪座再拜、祝文明読。祭官再拜。祝、祭官正面に至り、跪座し再拜。祝、立って進んで一拝し香を焚き、跪座して祝板をとり祝文を奏上。了って案上に復す。祝・祭官、立って再拜。了って着席。

13、賜酢、飲福。  
（奏樂）  
掌事は膳所に至り爵をとり、洗所に至り洗滌のち正面に進み、先聖・四配の爵より酒を沃取し、和して爵を初献の人に賜う。初献の人啐酒し、爵を掌事に返す。掌事はこれを受けて膳所に復す。（奏樂止む）

14、礼儀終。

### 13、送神の儀。

神官、送神の祝詞を奏す。

### 14、掌事、告辞。

掌事、拳式立会人、一般参列者に本日の祭儀了るを告ぐ。

### 15、鳴鐘二点、祭官退堂。

足利学校の積奠の特色は、祭儀の進行上、神官が大きな役割を果たすという点である。すなわち、開式にあたって大庠行事があり、祓詞を奏し、つぎに聖像を納めた龕を開扉し、迎神の祝詞をあげ、送神の儀においては、送神の祝詞をあげるという具合である。このように孔子祭に神官が登場し、招魂の儀をつとめるといえるのは、中国式の積奠からみるならば大きな変容であると言わねばならない。同時にこうした変化の中に、孔子の教えが日本に定着していく際の姿を見てとることもできよう。いずれにしても招魂の儀を神官が担当することは注目すべきことのように考えられる。

以上で日本において今日なお行なわれている孔子祭（公祭としての積菜、積奠）のうち、多久、閑谷、足利のそれについてごく簡単に紹介した。日本ではこの他にも東京湯島聖堂、長崎市興福寺内長崎聖堂、沖縄県那覇市久米孔子廟で積奠や積菜がおこなわれている。これらに関しては、筆者ははまだ参観の機会を得ていない。他日、参観する機会に恵まれたならば、報告したいと考えている。

右に紹介した多久、閑谷、足利の孔子祭は基本的には、内容を同じくするのであるが、同時にそれぞれ他には見られない特色をもあわせもっている。その由って来たる理由を他日究明したいものと考えている。

つぎに、これら日本の孔子祭を中国のそれと比較した場合に、全体としてどのような特徴があるのか、台北市

での積奠を紹介し、比較を試みることにしたい。

### 三、中国（台北）の孔子祭

筆者が台北市の積奠に出席したのは、一九七六年九月二八日である。

当日は積奠に先立って、まず聖祖殿（大成殿の後ろにある）において孔家の祖先祭（家祭）が、孔徳成氏を祭主として執りおこなわれた。

それが終了して、午前六時から台北市長が祭主となり積奠の儀が挙行された。この年ははじめて式典参列者を六百名（内三百名は師範大生）に制限したとのことであった。式場は人であふれ、全員立席であった。

大成殿にはすでに太牢（牛・豕・羊）が供えられ、東西の廡には豕が供えられていた。

当日の式次第はつぎの通りであった。

#### 1、式典開始宣言。

2、第一回目の太鼓。かがり火、香、ろうそくに火がともされる。

3、第二回目の太鼓。楽生、舞生、礼生が殿階の両端で入場を待つ。

4、第三回目の太鼓。各献官が先導にみちびかれ、庭の中央、殿階の下に立つ。

5、楽生、舞生就位。

6、執事就位。

7、糾儀官就位。殿階の上、東端に立つ。

8、陪祭官就位。式場中央、大成殿にむかって一列に並ぶ。台北市内の区長、校長があたる。女性陪祭官もあ

- 9、分献官就位。先導にみちびかれ、陪祭官の前に立つ。分献官は孔子の弟子の神位に幣帛を献ずる人で、台北市の局長がこの任にあたる。
- 10、正献官就位。先導にみちびかれ入場、分献官の前に立つ。孔子の神位に対し奉献する人。台北市長があたる。
- 11、開門。孔子廟正門がひらかれる。
- 12、犠牲を埋め祭場を清める。執事が犠牲の血と毛を盛った皿を持ち、埋める所に進む。
- 13、迎神。「咸和の曲」が奏せられる。執事が斧の型をした祭器、扇、傘をもち正門から孔子の霊を迎えに入る。
- 14、鞠躬。三回目の鞠躬がおわると奉献がはじまる。
- 15、献饌。執事が鯛をもち御膳をすすめる。
- 16、献香。「寧和の曲」が奏せられる。正献官が孔子の神位に献香。分献官が東西の四配、十哲の神位に献香、鞠躬。
- 17、正献官、第一回目の礼。「安和の曲」奏楽。塵生が旗を、節生が節をかけた、三十六人の舞生が舞う。終ると正献官が初献の礼をし、帛を献じ、爵を献じ、鞠躬三回をする。
- 18、分献官、第一回目の礼。分献官が東西の廡の四配、十哲の神位に進み、分献の礼を行なう。
- 19、祝文奉読。
- 20、鞠躬。

- 21、正献官、第二回目の礼。「景和の曲」奏楽。以下17に同じ。
- 22、分献官、第二回目の礼。18に同じ。
- 23、正献官、第三回目の礼。17、21に同じ。
- 24、分献官、第三回目の礼。18、22に同じ。
- 25、総統の献香。(代理)
- 26、奉祀官(孔徳成氏) 献香。
- 27、お供えの酒、ひもろぎを受ける。正献官が香案の前にすすみ、お供えの酒、ひもろぎを受け、鞠躬三回。
- 28、撤饌。「咸和の曲」。執事が撤饌。
- 29、送神。「咸和の曲」。正門外に孔子の霊を送る。
- 30、鞠躬。
- 31、祝文、幣帛を奉じて燎所にすすむ。
- 32、望燎。「咸和の曲」。正献官が燎所にいたり、望燎する。
- 33、もとの位置にもどる。
- 34、正門を閉じる。
- 35、退場。正献官、分献官、陪祭官、糾儀官がつぎつぎと先導にみちびかれ退場。ついで執事、楽生、舞生が退場。
- 36、式典終了。

台北における祝奠は、清代の文献、『聖門礼誌』<sup>13</sup>、『闕里文献考』<sup>14</sup>、『闕里儀注』<sup>15</sup>などが伝えている祝奠と同じ内容

であり、ほぼ清代の姿をとどめたものであるということができよう。

そして、先にも述べた通り、公祭である釈奠に先立って、家祭としての孔子祭が執りおこなわれている、という点が重要であろう。孔子祭には公祭としての釈奠、釈菜の他に、孔家の祖先祭ともいべき家祭としての孔子祭があるのである。現在、孔子の七十七代の裔孫、孔徳成氏が台北在住であるところから、孔徳成氏みずから祭主となつての家祭が、同じ孔子廟内の聖祖殿においておこなわれたのである。日本の孔子祭には、孔子を祭ることとはあつても、孔子の子孫が孔子を祭っていることを考慮した内容のものは皆無ではなからうか。孔子祭も公祭、家祭の双方が挙行されてはじめて全きものとなるのではなからうか。<sup>16)</sup>

#### 四、日本と中国の比較

以上、筆者が実際に出席することのできた日本の孔子祭、中国の孔子祭について簡単に述べた。以下、日中の双方の比較を試み、若干の考察を試みたい。

まず、基本的には日本の孔子祭も、中国の孔子祭も、中国の文献に定められた釈奠の内容を踏襲して、招魂、献饌、祭文奉上、共饌、撤饌という内容を骨子としている点において変わりはない。しかし、日本の孔子祭には、中国のそれには見られない内容をもつものもある。以下、一、二を指摘してみよう。

まず、中国の釈奠においては開式に先立って祭場を清めるために、犠牲獣の毛血を埋めることが行なわれる。しかし、日本の釈奠、釈菜においてはこれを見ることはできない。

これと関連して、中国においては、最も重要な祭祀には太牢(牛、豕、羊を供えること)を用いる習慣であるが、日本ではこれを受け入れることに激しい拒絶反応を示した。「三牲は忌むべきなり」とされ、これに代えて魚

介、鳥類が用いられて今日に至っている。犠牲獣の毛血による祭場の清め、或は犠牲獣の供饌は、日本民族の禁忌に触れる問題であり、もつとも根深い文化的特性の相異に起因するものである、ということができよう。

つぎに釈奠といえば、中国においては、孔子を中心として、その精神を継ぐ顔回、曾子、子思子、孟子の四配、さらには十二哲等をもあわせ祀るのが常例である。しかし、日本では、この点が簡略化されてしまっており、閑谷では孔子のみを釈菜の祭祀の対象としている。したがつてこのことに関連して日本における大成殿には四配や十二哲の神位を安置する「廡」と呼ぶ建物のないものが多い。日本と中国において、孔子の精神的伝統の重みが非常に異なることを物語るものであろう。

さらには又、公祭としての釈奠、釈菜の外に、孔子の子孫がこれを祖先祭として祀る家祭が中国の曲阜では連綿として行なわれていることを考慮した内容の式次第が皆無である。孔子祭とは一方で公祭として孔子の徳を顕彰すると同時に、他方で孔子の裔孫に思いを致すということがあいまつて、祭祀の目的を達成することができるように思う。今後の孔子祭における一つの課題ではなからうか。

つぎに迎神、送神の儀について述べたい。迎神とは釈奠にあつて、孔子の神霊を祭場に請じ入れる招魂の儀式である。迎神、送神の儀は、中国の釈奠においては入念、丁寧に執りおこなわれる。今『聖門礼誌』<sup>18)</sup>によつて曲阜における丁祭の時の「迎神」の有様を記してみれば、以下の通りである。

賛相「迎神」ととなえ、伶官随つて「迎神」ととなえ、麾生、麾をあげ「楽奏宣平の章」ととなえ、祝を打ち楽をなす。舞は無い。工祝、手爐を執つて太祝生・太史生を導き、中階より降り、杏壇の前に至る。工祝、「求神」ととなえ、正献官以下ともに跪く。工祝、「燔燎」ととなえ、太史生、柴をあげ、太祝生、火をあげて蕭艾香草を焚き、神を陽に求める。工祝、「灌鬯」ととなえ、太史生、黄彝の尊酒をくみ、太祝生、禾斝をあ



げ、酒を茅沙にそそぎ、神を陰に求む。工祝、「往迎」ととなえ、工祝・太祝・太史、正献官以下を前導し、趨行して大成門内の道左に至って拱立する。執事生、あらかじめ神庫に向って神主を請い、輿に登し、幼孫をして抱持せしめ、族人四名これをつぎ、その各位の神主は執事生抱持し、次によって前行する。族人の掌輿二名、神輿の左右にあり、執灯四名、神輿の四隅にあり、捧袞衣四名前にあり、捧宗器十二名また前にあり、挑燭四名また前にあり、礼楽生引導して、奎文閣、大成門中階より廟に入る。工祝、「神降」ととなえ、正献官以下皆跪いて道左に迎え、太祝・太史、神輿に至って詞を致す。神輿やたたずむ。工祝、「分班」ととなえ、神輿を前導して行く。正献官以下ともに輿の前であって趨行する。卑なる者は前にあり、尊なる者は後にあり、拜位に至って各々退いて右に列す。神輿、中階より階にのぼり、執事生、神主を奉じて殿に入り、神位に安んじ、宗器を左に陳し、袞衣を右に設ける。各執事生は各神主を安奉する。鳴賛、「參神」ととなえ、正献官以下ともに拜位に進む。鳴賛、「三跪九叩頭」ととなえ、正献官以下三跪九叩頭してともに起立する。あわせて「送神」の儀も見ておきたい。<sup>19)</sup>

鳴賛、「辞神三跪九叩頭」ととなえ、正献官以下三跪九叩頭しおわって、麾生、麾をふせ、敵をならして樂やむ。鳴賛、「送神」ととなえ、伶官、「送神」と伝唱し、麾生、麾をあげ、「樂奉徳平の章」ととなえ、祝をうち樂をなす。舞はない。執事生、神主を奉じて殿門を出で、輿に登し、幼孫をして抱持せしめ、四人輿をかついで行く。各執事生、神主を抱持し、次によって前行し、掌輿・執灯、宗器を捧げ、袞衣・挑灯者、また前行し、礼生・樂生、引導して中階より降り、舞生、両班に分れ、神輿に向って拱揖し、工祝、太祝生・太史生を引き、先だつて杏壇の拜位前に立つ。工祝、「神降」ととなえ、太祝・太史生、神輿に至って詞を致す。神輿やたたずむ。工祝、「分班前導輿行」ととなえ、正献官以下輿の前であって趨行する。卑なる者は前にあり、尊なる者は後にあり、大成門内に至り、各々退いて道左に列し、神の門を出ずるをまつ。工祝・太祝・太史を導いてまわる。工祝、「神去」ととなえ、引賛、「復位」ととなえ、正献官以下次によって拜位に復す。

以上のように『聖門礼誌』記するところの迎神、送神の儀はまことに心のこもった内容であることが判る。筆者が参加した台北における釈奠においても迎神、送神の儀は厳肅にとりおこなわれ、迎神、送神の光景はあたかも「如在（いますごとし）」であった。『關里文献考』の記載によれば、釈奠に先立って祭官が潔齋するが、飲食するにも、居処においても、笑語の際にも、志意においても、樂しむ所においても、嗜むところにおいても、「思神する」（神を思念する）ことが求められ、あらゆる時の心づかいが「精白」（清白）たるべきことが求められた。<sup>20)</sup> 清澄な心で孔子の靈と接する準備がなされていたことが判る。

読者の理解に便ならしむるために、日本における同様の儀式を紹介したい。中国の釈奠における迎神、送神の儀は、やや唐突かもしれないが、伊勢神宮の遷宮における「遷御の儀」が、近い内容をもつように思われる。以下に第六十回神宮式年遷宮の際の「遷御の儀」を、『神宮 第六十回神宮式年遷宮』<sup>21)</sup> から紹介してみたい。

式年遷宮の眼目ともいべき最も中心的な御儀である。遷御の日時は、いうまでもなく御治定を仰ぐ慣例である。皇太神宮の遷御は昭和四十八年十月二日午後八時、豊受大神宮の遷御は同年同月五日午後八時と定められ、おごそかに行なわれた。他の諸祭、行事の時刻は諸員の参進する時刻であるが、この遷御の時刻は、神儀が正殿より出御する時刻である。したがって、勅使以下および祭主以下はそれより二時間前の午後六時に参進して御準備を奉仕する。供奉員、参列員、式外参列員、特別奉拝者等はそれよりもさきに所定の席に着いて、御儀をお待ち申しあげる。

諸員の装束は、勅使、勅使随員は束帯を着け、木綿鬘を掛け、勅使随行員（三人）は衣冠を着ける。祭主は

小桂、表着、袴に明衣を着け、木綿鬘を掛け、大宮司、少宮司、禰宜は束帯に明衣を着け、木綿鬘、木綿襦を掛け、権禰宜のうち五人は束帯を着け、明衣、木綿鬘を掛け、その他の権禰宜、宮掌、宮掌補、楽長、楽師は衣冠を着け、明衣を掛け、供奉員は衣冠を着ける。

祭儀の概要は、夕闇の迫る午後六時、第三鼓の合図とともに、勅使以下および祭主以下が齋館正門より参進第二鳥居外において列立、宮掌が大麻、御塩をもって勅使以下を敲い清め、ついで諸員玉串行事所に至り、まず勅使、勅使随員は玉串行役の進める太玉串を両手に執って参進、勅使随行員随従し、ついで祭主、大宮司、少宮司、禰宜、玉串所役の権禰宜もしいに太玉串を両手に執って参進（豊受大神宮においては玉串所役の権禰宜は太玉串を執らない）、権禰宜以下が従行する。祭主以下は板垣御門下において御塩の清めを受ける。

諸員は中重の版に着く。まず権禰宜が順次勅使以下ならびに祭主以下の各太玉串を内玉垣御門下に納め、ついで宮掌が御鑰を大宮司に進める。勅使以下および祭主以下は進みて瑞垣御門内の版に着き、勅使は御祭文を奉上、ついで大宮司、少宮司は御扉を開く。この間、楽長、楽師は神楽歌を奏する。所役の権禰宜は殿内および大床の灯に点火する。このとき、禰宜（二人）、権禰宜（二人）は新宮に至りて、禰宜は御扉を開き、権禰宜は殿内および大床の灯に点火して、御用意を奉仕する。正宮においては、祭主、大宮司、少宮司、禰宜は殿内に候し、勅使以下は御階の下、東方に列立し、諸員は御階の下、東西に列立する。やがて祭主は殿内より退いて御階の下、西方に立たれる。御階の下、東方に卓立する権禰宜が召立文を読み上げる。召立に依じて、宮掌、宮掌補は御装束神宝を捧持してしだいに御列を整え、権禰宜、宮掌は行障、絹垣を奉仕する。午後八時になろうとする少し前に、瑞垣御門下に候する宮掌が声高く鶏鳴（三声）を唱える。ついで、勅使は御階の下に進んで出御を奏上、正八時、神儀は大宮司、少宮司、禰宜によって奉戴、白絹の行障、絹垣の御内に囲まれ、楽長、

楽師の奏する神楽歌、和琴、箏、笛の音の響きわたる神殿なる浄間の中を肅々と進まれ、瑞々しい新宮に遷御される。勅使は前行を奉仕し、勅使随員はその前にて警蹕を奉仕し、祭主は後陣に供奉される。新殿に入御されれば、御階の下、東方に卓立する権禰宜が召立文を読み上げる。召立に依じて御装束神宝はしだいに殿内に奉納され、諸員は内院の版に着く。ついで殿内および大床の灯火が撤せられ、大宮司、少宮司は、楽長、楽師の奏する神楽歌のうちに、御扉を閉じて版に着く。勅使は御祭文を奏上し、終わって大宮司は勅使の前に進んで、遷御の御儀終わる旨を申しあげる。ついで諸員中重の版に着き、大宮司は御鑰を宮掌に付してこれに封をつける。諸員奉拝を行ない、ついで退出、別宮を遙拝して退下する。

長い引用になつてしまつたが、釈奠における迎神、送神の儀がかもす雰囲気が想像いただけただけではなからうか。<sup>22</sup>ところが、日本においては、この迎神、送神の儀が甚だ簡略化されており、閑谷学校の釈奠においては、この儀式が欠けている。このように日本において極端に簡略化されてしまつた背景には、日本では孔子像をもつて、孔子の神霊が宿っているものと考えたからではないかと推測される。仮にもしそのように推測して誤りがなければ、迎神、送神の儀が日本と中国で大きな相異を見せた背景には、「神霊」をめぐつて、その受けとめ方、考え方に大きな距りが存在するためではなからうかとも思われる。後考にまちたいと思う。

なお、この迎神、送神の儀は先にみたように、足利学校の釈奠では、神官の役目となつている。これ又日本の変容として注目すべきことであり、「神霊」の所在、あり方をめぐつて日本・中国に、文化的な相異が存在していることを示唆している。

## 五、むすび

昨年、筆者は佐賀県の多久聖廟、岡山県の閑谷学校の積菜、足利学校の積奠に参列する機会を与えられた。一九七六年に参加することのできた台北の積奠と比較して印象の一端を述べてみた。

今日、曲阜においても孔子祭が復活されたとのことであるが、孔子の再評価が進んでいることはまちがいあるまい。ただし、私たちが今、孔子の教えを学ぶという時、何を、どのように学ぶべきなのかは、よほど検討しなければならぬ問題のようである。人類の遺産ともいふべき孔子の教えを、どのように受け継いで行くべきか、今日、国際化社会の到来を前にして、改めて真剣に考えなおす必要があるように思われる。

当然、過去の歴史をふまえつつも、将来の課題に対応できる内容でなければならぬであろう。ここで紹介した積奠の内容の比較は、日本人が「人類の教師」としての孔子から、何を、どのように学ぶべきかを考える際、考慮すべき問題のあることを示している。

### 注

- (1) 一九八七年十月十八日に挙行された。
- (2) 『重要文化財 多久聖廟』(昭和五十八年刊、多久市教育委員会編)による。
- (3) 多久茂文「文廟記」。前記『多久聖廟』所収。
- (4) 前記『多久聖廟』に収載されている。
- (5) 当日式場で配布されたリーフレット。実際には日本語訳も記されているが、ここでは省略した。
- (6) たとえば津田左右吉の見解などはその代表である。
- (7) 一九八七年十月三十一日挙行。
- (8) 特別史跡閑谷学校顕彰保存会編『増訂閑谷学校史』(昭和六十二年刊)による。以下同様。
- (9) 当日配布された「閑谷積菜式」による。これは池田家文書所収の「閑谷積菜之儀」に基いている。
- (10) 元禄十五年八月の積菜の次第を定めた「閑谷積菜之儀」においてすでに、迎神、送神の儀は見えない。又『日本教  
育史資料』卷十六所載の同校積菜の条にも見えていない。
- (11) 一九八七年十一月二十二日挙行。
- (12) 秋間正二「積奠考」(一九八六)。
- (13) 孔衍沢撰、光緒十三年刊。
- (14) 孔繼汾撰。
- (15) 同右。
- (16) 拙稿「家祭としての孔子祭」(『モラロジー研究』二十二号所収)参照。
- (17) 『日本紀略』弘仁十一年二月丁丑祭。『延喜式』によれば、日本では鹿、豕の乾肉が用いられた。
- (18) 馬場春吉『孔子聖蹟志』(昭和八年刊)に基いた。ただし文章は若干改めた。
- (19) 同右。
- (20) 『關里文献考』卷十九。
- (21) 福山敏男等編、昭和五十四年刊。古くは園田守良『神宮典略』参照。
- (22) なお又春日大社の「若宮おん祭り」における神の出現は、神秘感あふれるものだという(倉林正次「祭りの構造」  
二二三頁)。
- (23) 昌平坂聖堂においては、元禄四年の積菜の時、迎神、送神の「読詞者」があった(『憲廟実録』)。又元禄十年の積奠  
においても、迎神詞、送神詞が読み上げられている(写本「昌平学聖堂積奠式」)。
- (24) 湯島聖堂でも同様の現象が見られるという。倉林正次「祭りの構造」(昭和五十年刊)参照。